

## 保育における省察の構造

杉村伸一郎<sup>1</sup>・朴 信永<sup>2</sup>・若林 紀乃<sup>3</sup>

### Structure of reflection in early childhood care and education

Shinichiro Sugimura<sup>1</sup>, Shin-Young Park<sup>2</sup>, and Sumino Wakabayashi<sup>3</sup>

In order to study structure of reflection, a questionnaire was administered to ask to what extent kindergarten and nursery teachers reflect on various subjects. Through factor analysis, 2-factor structure was found regardless of types of subjects such as a child, oneself, and others, and each of the factors were considered to correspond with “reflection in action” and “reflection on action” which Schön (1983) claimed. When studying correlations between subscales, different subjects showed weak correlations in the case of “reflection in action” while they showed relatively strong correlations in the case of “reflection on action.” Additionally, those two types of reflection indicated relatively strong correlation when reflection was given on the same subject, but, they showed weak correlation in whole when reflection was given on different subjects. Based on those results, it was discussed that reflection needs to be classified according to subject and level.

**Key Words** : Kindergarten and nursery teachers, Reflection, Reflective practice

#### 問題と目的

保育者の実践と成長において省察は重要な役割を果たすと考えられてきた。例えば津守(1980)は、反省に考察を加える精神作業を省察とよび、省察により「実践の場では気づかれなかった子どもの世界や、自分自身の前提を、より明瞭に見ることができるし、それらのことの本質に近づくであろう」と述べている。また、最近では、保育者養成(安藤, 2000)や保育カンファレンス(若林・杉村, 2005)においても、省察が重視され、保育職の専門性を表す指標の一つになりつつある。

こうした状況にもかかわらず、保育者の省察に関する理論的研究や実証的研究で論文として公刊されているものは少なく、その多くが事例に基づいた考察である。例えば、浜口(1999)は、省察に関する数少ない理論的研究であり、

省察のプロセスを(1)実践、(2)想起、(3)記録の記述、(4)解釈、(5)再び実践、という5つの小過程からなるサイクルとして捉えた。吉村・吉岡・岩上・田代(1997)は、2名の保育者に観察と面接を行った結果から、実践→保育当日の省察→実践→翌日の省察→実践、という実践と省察の連続過程を描き、保育当日の省察の機能を経験的記述化、翌日の省察の機能を抽象的一般化と考察した。

また、名須川(1997, 2003)は、園内研修において、子どもの行動を見て記述した後に続く省察を、行動の解釈(省察1)と長期的・循環的省察ないしは弁証法的思考(省察2)に分類し、解釈学的手法により分析した。その結果、保育者の気づきは、(1)表面的な気づき、(2)幼児の内面への気づき、(3)保育者自身の内面の気づき、(4)気になる子どもをめぐる気づきから保育者自身の枠組みへの気づき、へ至ること、気づきの契機となるのは、他の保育者との話し合いといった「他者」の存在であること、

1 広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設  
2 宇部フロンティア大学短期大学部保育学科  
3 広島文化学園大学

を明らかにした。

以上のように、保育における省察に関する先行研究は一定の成果を上げてきた。しかし、それぞれの研究において、用いている用語や着目する時間の範囲が異なるために、各研究の知見を整理したり比較したりすることが困難である。したがって、様々な知見を総合して保育実践に活用するためには、保育における省察を捉える共通の枠組みが必要であると考えられる。

保育とは領域が異なるが、心理学における知能や性格に関しては、因子分析という統計的手法の導入により、その構造が明らかになり研究が大きく発展した時期がある。それゆえ、保育における省察研究においても、事例研究とともに計量的なアプローチを行い、省察の基本的な因子を抽出し、その構造を解明することが不可欠であると思われる。そうすることにより、省察を捉える共通の枠組みが形成され、省察というあいまいな概念が明確になり、省察の診断や改善も可能になるであろう。また、医療での説明や教育の場において、人体の様々な部位のモデルを利用することにより、情報を正確に伝達したり理解を深めたりしているように、省察のプロセスをモデルとして示すことにより、保育者研修などで高い成果を上げることが期待できる。

しかしながら現在のところ、保育における省察に関して、計量的なアプローチを行っている研究は、杉村・朴・若林（2006, 2007）の2つだけであり、この2つも省察の基本的な因子の抽出には成功していない。具体的には、杉村・朴・若林（2006）では、保育者自身と他者を対象とする省察に関しては、1因子構造が妥当であると考えられ、想定した3つないし2つのレベルを見出すことができなかった。また、杉村・朴・若林（2007）では、子どもを対象とする省察に関しては、行動、感情、認知の3つの側面を考慮し作成したにもかかわらず、得られた因子構造は、省察が及ぶ時間の範囲という観点からの区分が適切であることを示唆していた。そこで本研究では、杉村・朴・若林（2006, 2007）の問題点を改善することにより、保育における省察の構造を検討することを目的とする。

ところで、省察はどのように区分できるのだろうか。保育以外の領域にも目を向けると、近年最もよく引用されているのは、Schön（1983）の「行為の中の省察」と「行為につい

ての省察」いう区分である。また、Mezirow（1981）は、「意識レベル」と「批判的意識レベル」の2つに分けている。さらに、授業における教師の省察に関しては、Grimmett（1988）が3つのレベルに区別している。第1レベルの省察は、行動についての思慮深さであり、意識的で熟慮的な働きがある。第2レベルは、良い教え方をめぐる考察、様々な活動から生じる結果を予想することが含まれる。そして、第3レベルでは、今までの経験を再構成し、行為する状況に新たな意味を与えたり、新たな理解を形成したりする。

以上の区分は、先に紹介した保育における省察と同様に、2つもしくは3つのレベルが想定されている点で共通している。しかし、いずれの分類も、各レベルにおいて、実践前の計画・予測的な省察と実践後の分析・評価的な省察が区別されていない。また、省察の対象が自分自身なのか子どもなのかといった違いや、省察における他者の存在などが十分に考慮されていない。

省察という概念は、狭義では、実践中や実践後の振り返りを意味し、実践前の見通しを立てるといような活動は、省察に含まれないこともある。しかし、計画や予測を立てるとい活動は省察に基づいて行われることが多いので、これらの活動を省察から切り離して考えず、両者を併せて取り扱った方が、保育という活動全体における省察の役割を総合的に理解することができると考えられる。それに加えて、先に述べた名須川（1997, 2003）の結果は、子どもに対する気づきと保育者自身に対する気づき、そして、他の保育者との話し合いといった他者の存在、という3つを区別する必要があることを示唆している。

現時点で、以上の区別を踏まえた省察のモデルを提唱しているのは、筆者の知る限り、幼児期の子育てにおける親の省察を対象にした朴・杉村（2006）だけである。そこで本研究では、朴・杉村（2006）の省察の3層モデルを援用し、保育における省察を検討する。

Figure 1 に示したように、省察の3層モデルでは、1次的、2次的、3次的と省察を3つのレベルに区分しており、省察のレベルが高くなるにつれて、省察の内容が抽象的、一般的になるとともに、省察の対象となる時間の範囲が長期的になると仮定している。そして、それぞれのレベルの省察により、なんらかの気づきが生

じたり、それらがある程度まとまり個別的な認識が形成されたり、保育観や発達観といった一般的な認識が形成されたりすると考えられている。このモデルに従えば、省察は、自己や他者の言動・認知・感情を監視し分析・評価するとともに、それらに基づいて目標や計画・予測を立て制御すること、と定義できるであろう。

本研究では、このような省察を捉える枠組みに基づき、以下の点を計量的なアプローチにより検討する。(1) 省察の3層モデルにおける1次的省察から3次的省察に対応した因子が抽出されるのか。(2) 省察の対象が自分自身であっても子どもであっても同様の因子が抽出されるのか。(3) 省察のレベルと省察の対象となる時間の範囲がどの程度関連しているのか。(4) 他者をとおした省察も含めた省察の全体構造はどのようなものであるか。(5) 保育における省察は一般的な内省とどの程度関連しているのか。

## 方 法

**対象者** 広島県A市の公立の保育所に勤務する保育者138名(女性130名, 男性5名, 不明3名, 平均年齢38.7歳, 平均保育経験年数17.7年)であった。

**調査時期等** 2007年3月上旬に各保育所に質問紙を郵送し, 7日後までに返送を求めた。保育所単位での回収率は93.9%(31/33)で, 保育者単位では90.8%(138/152)であった。

**質問紙の内容** 質問紙の最初の頁には, 性別, 年齢, 保育経験年数等を尋ねるフェイスシートがつけられ, 保育における省察に関する36項目と, 省察の対象となる時間の範囲に関する12項目が続いた。評定は, 「まれに」「たまに」「ときどき」「よく」「いつも」の5段階であった。さらに, 一般的な内省を調べるために, 辻(2005)の自己意識・自己内省尺度の中から, 自己内省に関する6項目, 自己反芻に関する5項目, 内的状態の意識に関する4項目を実施した。これ以外にも, 保育者の日常に関する質問などが13項目含まれていたが, 紙幅の関係から項目内容の詳細ならびに結果を本稿では割愛する。

省察に関しては, 杉村・朴・若林(2006)で作成された, 保育者自身と子どもに関する各12項目と, 他者に関する8項目を次のような方針で追加・修正して用いた。まず, 全体的には, 想定した省察のレベルの項目としてより適切なものになるように改善した。例えば, 保育者自

身に関する省察では, 実践中の省察が因子として抽出されにくかったので, 予備調査で意味がわかりにくいと指摘された「子どもとのやりとりの中で, はっと我に返る瞬間がある」を削除し, 「子どもと話すとき, 自分の言動や態度を意識することがある」を加えた。また, 比較的長期の省察項目として作成した「自分の長所・短所を踏まえながら保育を行っている」が, その他のレベルにも関連しているようであったので, 「保育者としての信念について考えることがある」に変更した。

そして, 子どもに関する省察では, ほめたり叱ったりは, 独自の因子を形成する傾向があったので, 「子どもをほめたり叱ったりする前に, 子どもの受けとめ方について考えることがある」を「子どもと話す前に, 子どもの受けとめ方について考えることがある」に修正したりした。さらに, 他者をとおした省察では, 全体の項目数が少なかったので, 「他のクラスの子どもが保育者とかかわる様子を注意深く見ることがある」など, 4項目を追加した。追加・修正した項目に関しては, 保育所に勤めた経験のある大学院生2名にチェックを依頼し, わかりにくいと指摘を受けた項目の表現を直した。

省察の対象となる時間の範囲に関しては, 保育の出来事を, 「保育中の子どもの状態・言動や自分の感情・態度など」と定義した上で, それぞれの時間の範囲の保育の出来事について考える程度を5段階評定で尋ねた。具体的には, 保育中と保育当日は, それぞれ, 「保育をしながら子どもや自分のことについて考えることがありますか」「保育終了後, 1日の保育の出来事について考えることがありますか」と尋ねた。それ以外は, 「○○の保育の出来事について考えることがありますか」という形式で, ○○の部分「昨日」「1週間以上前」「1ヶ月以上前」「3ヶ月以上前」「1年以上前」「明日」「1週間後」「1ヶ月後」「3ヶ月後」「1年後」とかえて尋ねた。

## 結 果

本研究では, 3-5歳児に対する日常の保育を想定して省察に関する項目を作成したため, 以下の分析は, 3-5歳児の担任である75名(女性71名, 男性3名, 不明1名, 平均年齢37.2歳, 平均保育経験年数15.0年)を対象に実施した。

**尺度の構成** まず, 保育における省察に関す

る質問項目の選択肢「まれに」－「いつも」に対して1点－5点を与え、36項目の回答の平均値と標準偏差を算出した（Table 1, Table 2, Table 3参照）。

次に、保育者自身に関する省察、子どもに関する省察、他者をとおした省察、に分けて主因子法による因子分析を行った。最初に、保育者自身に関する省察12項目に対して因子分析を行った。固有値の変化（5.15, 1.36, 1.05, 0.89, …）と累積寄与率（第2因子までで54.2%, 第3因子までで63.0%）、さらに、因子の解釈可能性を考慮すると、2因子構造が妥当であると考えられた。そこで、再度2因子を仮定して、主因子法・直接オブリミン回転による因子分析を行った。回転後の最終的な因子パターンを表1に示す。因子間相関は-0.57であった。第1因子に負荷量の高い項目は、比較的短期および長期の自己の保育に関する省察であり、第2因

子に負荷量の高い項目は、実践中の自己の態度や言動に対する注意や意識についてであったので、順に「自己考慮」「自己注意」と命名した。

同様に、子どもに関する12項目に対して因子分析を行った。固有値の変化（5.24, 1.25, 1.17, 0.78, …）と累積寄与率（第2因子までで54.1%, 第3因子までで63.8%）、さらに、因子の解釈可能性を考慮すると、2因子構造が妥当であると考えられた。そこで、再度2因子を仮定して、主因子法・直接オブリミン回転による因子分析を行った。回転後の最終的な因子パターンを表2に示す。因子間相関は0.62であった。第1因子に負荷量の高い項目は、比較的短期および長期の子どもの発達に関する分析的な省察であり、第2因子に負荷量の高い項目は、実践中の子どもの行動や態度に対する注意や予想についてであったので、順に「子ども分析」「子ども察知」と命名した。

Table 1 保育者自身に関する省察項目の平均値と標準偏差ならびに因子分析の結果（直接オブリミン回転後の因子パターン）

レベル	項目内容	I	II	平均値	SD
2	子どもと話した後、自分の言い方が適切かどうか考えることがある	0.75	0.05	3.92	0.67
3	保育者としての自分の長所・短所を考えることがある	0.63	0.05	3.63	0.83
2	子どもに何か言う前に、自分の言動の影響を考えることがある	0.61	-0.12	3.62	0.75
2	子どもに何か言った後、そのときの自分の感情について考えることがある	0.60	0.02	3.77	0.69
3	自分の保育の方針を振り返り改善すべきところを考えることがある	0.58	-0.10	3.68	0.72
3	「子どもを保育する」とはどういうことか考えることがある	0.55	-0.08	3.41	0.81
1	保育において自分の振る舞いに目を向けることがある	0.49	-0.42	3.67	0.76
1	子どもと話すとき、自分の態度に注意を向けることがある	-0.25	-0.99	3.76	0.69
2	子どもに何か伝える前に、自分の伝え方について考えることがある	0.25	-0.59	3.87	0.76
1	子どもと話すとき、自分の言動や態度を意識することがある	0.18	-0.54	3.93	0.66
3	保育者としての信念について考えることがある	0.13	-0.53	3.40	0.87
1	子どもに対する自分の言動に気をつけることがある	0.13	-0.43	4.05	0.57

注：レベルの数値は項目作成時に想定された省察のレベルを表す。1：1次的省察，2：2次的省察，3：3次的省察。

Table 2 子どもに関する省察項目の平均値と標準偏差ならびに因子分析の結果（直接オブリミン回転後の因子パターン）

レベル	項目内容	I	II	平均値	SD
3	子どものこれからの成長について考えることがある	0.90	-0.15	3.88	0.68
2	子どもと話した後、子どもがどのように受けとめたか考えることがある	0.79	-0.01	3.96	0.67
3	子どもにとって、将来何が必要か考えながら育てている	0.60	-0.01	3.84	0.83
3	子どもの普段の行動から、子どもの長所・短所を考えることがある	0.58	0.10	3.95	0.70
2	子どもがどう変わってきたか考えることがある	0.56	0.05	3.93	0.66
3	子どもに関する長期的見通しについて考えることがある	0.46	0.36	3.56	0.79
3	保育の出来事から「子ども」の本質について考えることがある	0.38	0.22	3.35	0.81
2	子どもと話す前に、子どもの受けとめ方について考えることがある	0.28	0.27	3.70	0.75
1	子どもと一緒にいるとき、子どもの行動に注意を向けることがある	-0.13	0.82	4.44	0.64
2	あらかじめ子どもの行動や態度を予想しておくことがある	0.16	0.65	3.69	0.84
1	子どもの言動に気をつけている	0.02	0.61	4.15	0.59
1	子どもと話しているとき、子どもの表情や態度に注意することがある	0.22	0.54	4.29	0.56

注：レベルの数値は項目作成時に想定された省察のレベルを表す。1：1次的省察，2：2次的省察，3：3次的省察。

また、他者に関連する12項目に対して因子分析を行い、固有値の変化（5.22, 1.40, 1.29, 0.86, …）と累積寄与率（第2因子までで55.1%, 第3因子までで65.8%）, さらに、因子の解釈可能性から、2因子構造が妥当であると考えられた。そこで、再度2因子を仮定して、主因子法・直接オブリミン回転による因子分析を行った。回転後の最終的な因子パターンを表3に示す。因子間相関は0.60であった。第1因子に負荷量の高い項目は、他者との会話や他者の保育の観察によって得られた情報を自己の保育の省察に利用する内容であり、第2因子に負荷量の高い項目は、他のクラスの子どもや他の保育者の様子に注意を向けたり見たりする内容であったので、順に「他者情報利用」「他者情報収集」と命名した。

最後に、探索的因子分析の結果の通り、それぞれが2因子構造であるかを確かめるために、Amos16.0を用いて確認的因子分析を行った。保育者自身に関する省察, 子どもに関する省察, 他者をとおした省察の3つとも2つの因子からそれぞれ該当する項目が影響を受け、すべての因子間に共分散を仮定したモデルで分析を行った。その結果、適合度指標等は、保育者自身に関する省察では、GFI=.908, AGFI=.852, RMSEA=.038, AIC=95.321, 子どもに関する省察では、GFI=.901, AGFI=.845, RMSEA=.033, AIC=93.258, 他者をとおした省察では、GFI=.910, AGFI=.848, RMSEA=.029, AIC=95.311であり、全体的にデータに適合した結果が得られた。

各尺度の得点

各因子に高い負荷量を示した項目の平均値を

算出することにより、各尺度の得点とした。その際、負荷量が低い項目や複数の因子に負荷量が高い項目は除外した。具体的には、保育者自身に関する省察では「保育において自分の振る舞いに目を向けることがある」を、子どもに関する省察では「子どもと話す前に、子どもの受けとめ方について考えることがある」を、他者をとおした省察では「子育てに関する本や雑誌を読み、自分の保育観と照らし合わせる」を除外した。そして、内的整合性を検討するために $\alpha$ 係数を算出した。以上の結果をTable 4に示す。 $\alpha$ 係数はいずれも0.80前後であり問題のない値が得られた。

尺度間相関 保育における省察の下位尺度間の相関係数をTable 5に示す。まず、省察の対象が同じもの同士では、「自己考慮」と「自己注意」が0.56, 「子ども分析」と「子ども察知」が0.62, 「他者情報利用」と「他者情報収集」が0.55と、いずれも比較的強い相関であった。また、省察のレベルが高次なもの同士でも、「自己考慮」と「子ども分析」が0.52, 「子ども分析」と「他者情報利用」が0.47, 「他者情報利用」と「自己考慮」が0.47と、比較的強い相関であった。

Table 4 各尺度の $\alpha$ 係数ならびに平均値と標準偏差

	項目数	$\alpha$ 係数	平均値	SD
自己考慮	6	0.80	3.68	0.52
自己注意	5	0.79	3.80	0.53
子ども分析	7	0.84	3.79	0.52
子ども察知	4	0.78	4.14	0.52
他者情報利用	6	0.85	3.38	0.64
他者情報収集	5	0.79	3.41	0.62

Table 3 他者をとおした省察項目の平均値と標準偏差ならびに因子分析の結果（直接オブリミン回転後の因子パターン）

レベル	項目内容	I	II	平均値	SD
2	他の人と保育の話をして、自分の保育の方針を改めることがある	0.78	0.08	3.19	0.80
2	他の人の保育を見て、今の自分の保育に必要なことに気づくことがある	0.77	0.17	3.45	0.86
2	いろいろな話を聞いて、自分の保育観を見直すことがある	0.73	0.03	3.57	0.85
2	他人と子どもの話をすることで、自分が担当している子どもの特徴に気づくことがある	0.71	0.00	3.48	0.88
2	他のクラスの子ども達と話をすることで、自分が担当している子どもの特徴に気づくことがある	0.65	-0.13	3.16	0.87
2	他の人と話しているうちに、保育に関する疑問が解決することがある	0.42	0.16	3.41	0.81
1	他のクラスの子どもが保育者とかかわる様子を注意深く見ることがある	-0.13	0.97	3.25	0.82
1	他のクラスの子ども達と保育者が話す様子を注意深くみることがある	-0.02	0.78	3.23	0.83
1	他の保育者の子どもに対する話し方に注意することがある	0.04	0.60	3.27	1.05
1	他の人が子どもにどのように接しているか注意深く見ることがある	0.18	0.43	3.95	0.71
1	他の保育者が担当している子どもの言動を注意深く見ることがある	0.04	0.40	3.35	0.73
1	子育てに関する本や雑誌を読み、自分の保育観と照らし合わせるがある	0.28	0.31	3.32	0.85

注：レベルの数値は項目作成時に想定された省察のレベルを表す。1：他者への注意，2：他者との交流。

それに対して、省察のレベルが低次元のもの同士では、「自己注意」と「子ども察知」は0.42であったものの、「子ども察知」と「他者情報収集」は0.33、「他者情報収集」と「自己注意」は0.23と、弱い相関であった。さらに、異なる省察対象の異なるレベルとの関連を検討したところ、「自己考慮」と「子ども察知」は0.26と弱い相関であるのに対して、「自己注意」と「子ども分析」は0.51と比較的強い相関であった。また、「子ども分析」と「他者情報収集」は0.37、「子ども察知」と「他者情報利用」は0.21、「他者情報利用」と「自己注意」は0.36、「他者情報収集」と「自己考慮」は0.33といずれも弱い相関であった。

**省察のモデルの検討** 省察のモデルを検討するために、Amos16.0を用い共分散構造分析によるパス解析を行った。まず、尺度間相関が1%水準で有意であった箇所にはパスを描いた。最初の矢印の向きは、基本的には、省察のレベルが低いものから高いものへという方向にし、他者情報利用だけは、他者の情報を利用して省察を行うという内容を考慮し、他者情報の利用から他の省察へという方向にした。得られた結果から、有意ではなかったパスを削除し、再度分析を行ったところ、Figure 2 に示したモデル

となり、適合度指標は、GFI = .992, AGFI = .972, RMSEA = .000であり、当てはまりがよく、AIC = 31.709であった。Figure 2 からパスを部分的に削除したり、パスを追加したり、あるいは、矢印の向きを省察のレベルが高いものから低いものへという方向にしたり、子ども認知や子ども分析から他の省察の方向にしたりすると、適合度が下がるとともに、AICの値も高くなったので、Figure 2 のモデルが最も適切であると判断した。

**一般的な省察尺度との相関** 保育における省察の下位尺度と辻 (2005) の自己意識・自己内省尺度の下位尺度である自己内省 ( $\alpha = .87$ )、内的意識 ( $\alpha = .65$ )、自己反芻 ( $\alpha = .83$ ) との相関係数を算出したところ、比較的強い相関が示されたのは、「自己考慮」と「自己内省」、「他者情報収集」と「自己内省」「内的意識」の間であり、「自己注意」と「内的意識」「自己反芻」、「子ども分析」と「自己反芻」、「子ども察知」と「自己内省」「自己反芻」、との間には、ほとんど相関がなかった (Table 5 参照)。

**時間の範囲別の省察の程度** まず、質問項目の選択肢「まれに」－「いつも」に対して1点－5点を与え、時間の範囲別の省察の程度の平均値と標準偏差を算出した (Table 6 参照)。

Table 5 保育における省察の下位尺度間ならびに一般的省察の下位尺度との相関係数

	自己注意	子ども分析	子ども察知	他者情報利用	他者情報収集	自己内省	内的意識	自己反芻
自己考慮	0.56**	0.52**	0.26*	0.47**	0.33**	0.51**	0.32**	0.24*
自己注意	—	0.51**	0.42**	0.36**	0.23*	0.29*	0.11	-0.02
子ども分析		—	0.62**	0.47**	0.37**	0.32**	0.35**	0.12
子ども察知			—	0.21	0.33**	0.14	0.26*	-0.07
他者情報利用				—	0.55**	0.29*	0.32**	0.29*
他者情報収集					—	0.43**	0.43**	0.29*

注：\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

Table 6 時間の範囲別の省察の程度の平均値と標準偏差ならびに保育における省察の下位尺度との相関係数

	1年前	3ヶ月前	1ヶ月前	1週間前	昨日	当日	保育中	明日	1週間後	1ヶ月後	3ヶ月後	1年後
平均値	2.04	1.88	2.22	2.72	3.53	4.08	3.95	4.59	3.73	3.18	2.55	1.94
標準偏差	0.96	0.78	0.82	0.79	0.76	0.69	0.90	0.57	0.93	0.93	0.94	0.92
自己考慮	0.29*	0.39**	0.54**	0.43**	0.53**	0.39**	0.28*	0.30*	0.28*	0.28*	0.28*	0.19
自己注意	0.32**	0.40**	0.55**	0.54**	0.49**	0.41**	0.48*	0.19	0.29*	0.26*	0.34**	0.16
子ども分析	0.25*	0.20	0.42**	0.26*	0.39**	0.29*	0.21	0.03	0.27*	0.35**	0.35**	0.11
子ども察知	0.16	0.16	0.24*	0.13	0.23*	0.14	0.10	0.15	0.33**	0.42**	0.26*	0.01
他者情報利用	0.19	0.17	0.28*	0.21	0.16	0.07	0.11	0.03	0.26*	0.14	0.04	0.14
他者情報収集	0.13	0.15	0.34**	0.23	0.25*	0.12	0.22	0.09	0.25*	0.24*	0.20	0.19

注：\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

平均値が最も高かったのは、「明日」の保育の出来事に関する省察であり、次が「当日」、そして「保育中」「昨日」の順であった。それに対して、最も低かったのは、「3ヶ月前」であり、次が「1年後」、そして「1年前」「1ヶ月前」の順であった。

次に、保育における省察の下位尺度との相関係数を算出した。その結果、「自己考慮」とは「3ヶ月前」から「当日」にかけて、「自己注意」とは「3ヶ月前」から「保育中」にかけて、比

較的強い相関がみられた。また、「子ども分析」では「1ヶ月前」と「昨日」で、「子ども察知」では「1ヶ月後」で、比較的強い相関がみられた。

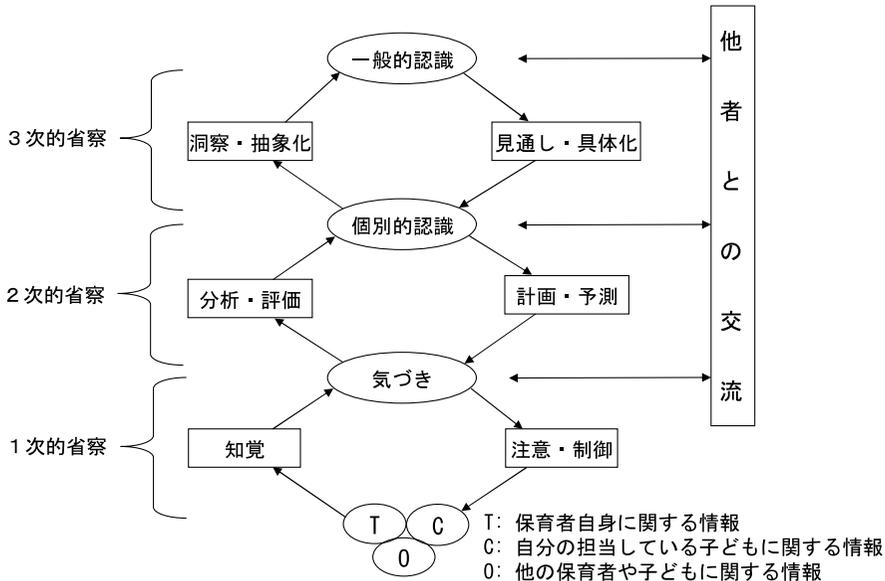
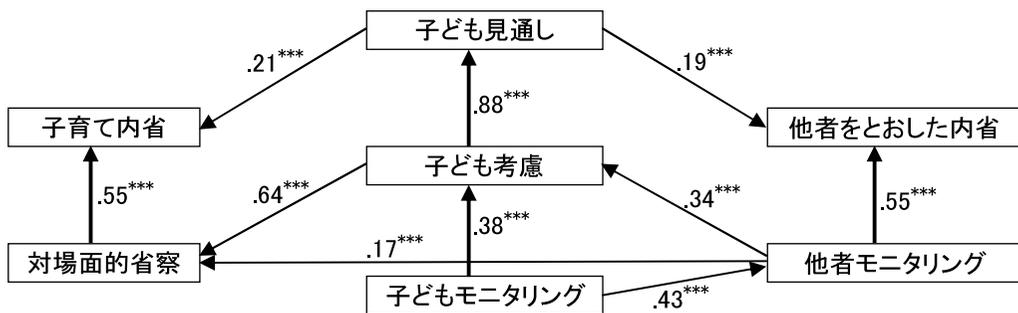


Figure 1 省察の3層モデル (朴・杉村, 2006を改変)



$\chi^2=18.835, df=8, p<.05$   
 GFI=.979, AGFI=.927, CFI=.987, AIC=58.835, RMSEA=.073  
 \*\*\* $p<.001$

Figure 2 共分散構造分析による省察過程のパス解析の結果

## 考 察

**保育における省察の構造** 本研究の主要な目的は、保育における省察の構造を検討することであった。探索的因子分析の結果、保育者自身に関する省察では「自己注意」と「自己考慮」、子どもに関する省察では「子ども察知」と「子ども分析」、他者をとおした省察では「他者情報収集」と「他者情報利用」という2因子構造が妥当であると考えられた。また、確認的因子分析を行ったところ、データに適合した結果が得られた。そして、因子分析の結果に基づき作成した6つの尺度の $\alpha$ 係数は、いずれも0.80前後であり問題のない値であった。

項目作成時には、保育者自身と子どもに関する省察では、3つのレベルを想定した。因子分析の結果をみると、両者とも、レベル1の項目が独立してまとまり、レベル2と3の項目が合併された形になっている。そして、それぞれの項目の内容を見ると、前者はSchön (1983) のいう「行為の中の省察」に、後者は「行為についての省察」に相当すると考えられる。

こうした観点から除外された項目をみると、「保育において自分の振る舞いに目を向けることがある」「子どもと話す前に、子どもの受けとめ方について考えることがある」の2つの項目は、「行為の中の省察」「行為についての省察」のいずれにも解釈でき、保育者によって想定したレベルが異なっていた可能性がある。また、「子育てに関する本や雑誌を読み、自分の保育観と照らし合わせることがある」は、文章の前半が「他者情報収集」、後半が「他者情報利用」に関連していた。今後これらの項目を改善する必要がある。

さて、省察の対象別に2つずつ、合わせて6つの省察の下位尺度が作成されたので、下位尺度間の相関を検討したところ、省察のレベルが高次なもの同士では比較的強い相関がみられた。それに対して、省察のレベルが低次なもの同士では弱い相関であった。この結果は、省察は「行為についての省察」レベルでは、省察の対象にかかわらず相互に関連して行われるが、「行為の中の省察」レベルでは、省察の対象ごとに独立して行われる傾向があることを示唆している。

そして、省察の対象が同じもの同士の異なるレベル間の相関は比較的強かったのに対して、異なる省察対象の異なるレベル間の相関は全体

的に弱かった。このことは、目の前の子どもに関する「行為の中の省察」とその子どもの「行為についての省察」は関連して行われるが、目の前の子どもに関する「行為の中の省察」と自らの保育の「行為についての省察」や「他者情報利用」とが、別々に行われる傾向があることを意味しており興味深い。

さらに、他者を通じた省察では、「他者情報収集」と「他者情報利用」との相関は比較的高いものの、「他者情報収集」と子どもに関する省察や保育者自身に関する省察との相関はほとんどみられなかった。このことから、保育者は、他者から情報を収集し、それを利用しようと試みることはできるものの、収集した情報を直接子どもや自分自身の省察に利用していない可能性が考えられる。保育における実践記録の重要性を述べている宮里・古庄 (2006) は、その冒頭で、保育者が研修を多く行い勉強をしている姿はよくみられるものの、それが実践を高めるものとはなっていないことを示し、得た理論や情報を実践につなげることの重要性を訴えている。今後、保育者が実践を高めるための活動をする中で、他者から情報を収集しそれを利用するだけでなく、子どもや自らに対する省察につなげて実践を振り返り高めていくことが必要であると考えられる。

また、共分散構造分析によるパス解析を行った結果、尺度間の相関から得られた上記の知見に加えて、省察の過程に関する知見が得られた。当初は、Figure 1 に示した省察の3層モデルのように、省察過程を循環的なものと想定していた。しかし、パス解析の結果、モデルの適合度は、省察のレベルが低いものから高いものへという方向にパスを描いた方が高く、計画や予測といった高次から低次に向けた省察の働きよりも、分析や評価といった低次から高次に向けた省察の働きの方が優勢であることを示唆していた。トップダウン的な省察が優勢であると、常に変化する子どもの状態に十分に対応することができなくなると考えられるので、妥当な結果であろう。さらに、保育者自身に関する省察と子どもに関する省察に関しては、前者から後者に向けてのパスの方が、その反対よりもモデルの適合度が高かった。保育者自身に関する省察と子どもに関する省察も、基本的には循環的な過程であると考えられるが、保育や幼児教育においては、保育者が子どもに意図的に働きかけることが多いので、そのことがモデルに反映

されたのではないと思われる。

**他の尺度や項目との関連** 次に、一般的な内省の程度を測定する「自己内省」と「内的状態の意識」と保育における省察の下位尺度との関連を検討したところ、最も相関が強かったのは、「自己内省」と「自己考慮」との間であり、妥当な結果が得られた。その一方で、「自己内省」と「子ども察知」との間には、ほとんど相関がなく、また、不安や抑うつなどにつながりやすいと考えられている「自己反芻」に関しては、相関がほとんどないか、弱い相関であった。以上のように、一般的な内省尺度との相関係数は、保育における省察のある部分は一般的な省察とあまり関連のないことを示唆しており、一般的な内省尺度とは別に保育における省察の尺度を開発する必要性ならびに、省察尺度を複数の対象やレベルごとに作成する必要性を裏付けているといえよう。

また、時間の範囲別の省察の程度との関連を調べたところ、「1ヶ月前」に関しては全ての省察の下位尺度との間に有意な中程度の相関がみられた。このことから、1ヶ月の保育を振り返る保育者は、保育に関してあらゆる側面から省察をしているのではないかと考えられる。いいかえれば、日常の保育においてあらゆる側面から省察している保育者は、1ヶ月単位で自らの保育を振り返る作業をしているのかもしれない。「自己考慮」とは「3ヶ月前」から「当日」にかけて、「自己注意」とは「3ヶ月前」から「保育中」にかけて、比較的強い相関がみられたのも、実践者としての自分を中心に振り返るからだと思われる。

**今後の課題** 本研究では、保育における省察の構造を明らかにするとともに、省察尺度を作成し、その信頼性と妥当性がある程度確認された。しかし今回は、因子分析を実施するには問題のない対象者数を確保することができたが、6種類の省察をそれぞれどの程度行っているのか、という省察のパターンなどの個人差の分析を行うには十分な人数ではなかった。今後は対象者の数を増やし、各種の量的分析を行うとともに、省察の程度が高い保育者と低い保育者を選び、両者の保育を観察により比較するなど、質的な検討も行っていきたい。

その際には、本研究で作成された省察尺度が、思考スタイルに類似した性質のものを測定しているということに留意する必要がある。思考スタイルとは、能力を使う際の好みであり、能力

そのものではなく、課題や状況によって変わると考えられている (Sternberg, 1997/1999)。これと同様に、省察尺度の得点は、省察能力そのものではなく、その保育者が置かれた状況や文脈が反映されていると考えられる。つまり、省察尺度の得点が高いほど保育がうまくいくとは限らず、省察のパターンなどが解決すべき課題や状況と適合しているかが問題になるのである。具体的には、年少児を担当している時には有効であった省察のパターンが、年長児担当になると有効でなかったり、保育者になって3年目には有効であったものが、10年後にはそうでなかったりということや、その逆のことが生じるであろう。また、35歳の保育者の「他者情報利用」得点も、平均年齢が27歳の保育者の集団に入った場合と50歳の集団に入った場合とで異なるであろう。

さらに、本研究では、省察の態度だけに着目し項目を作成し、その共変関係から省察の動的なパターンである構造を推定したため、省察で用いられる具体的な知識に関しては検討していない。より実践に役立つ研究として発展させていくには、態度にとどまらず、省察の知識や技能も含んだ検討が必要である。今後は、省察において、何に注意を向け、そこで得られた情報をどのように利用しているのか、その際、どのような知識が活用され、それらは相互にどのように関連づけられているのか、さらには、様々な省察がどのように組み合わせられて実践が行われているのか、といったことを明らかにしていくべきであろう。このような研究を行うには、保育実習生のモニタリング行動を通して実践的知識を検討した吉田 (1992) の研究や、教師志望学生の教授行動に関するメタ認知的知識を検討した中條・磯崎・藤木・米田 (2007) の研究などが参考になるとと思われる。

単なる保育技術の熟達だけではなく、自らの保育をあらゆる方面から振り返る反省的実践が求められている今、保育者はカンファレンスや事例検討などの機会を意図的に設けながら、他者の情報を利用して、子どもと自分自身に関する省察を深めていく必要がある。その際には、本研究のような基礎研究を積み重ね、省察のモデルやチェックリスト等を提示することにより、保育者が省察の仕組みや省察に関する知識、省察活動を活性化させる方法などを、学びやすくすることが重要になるであろう。

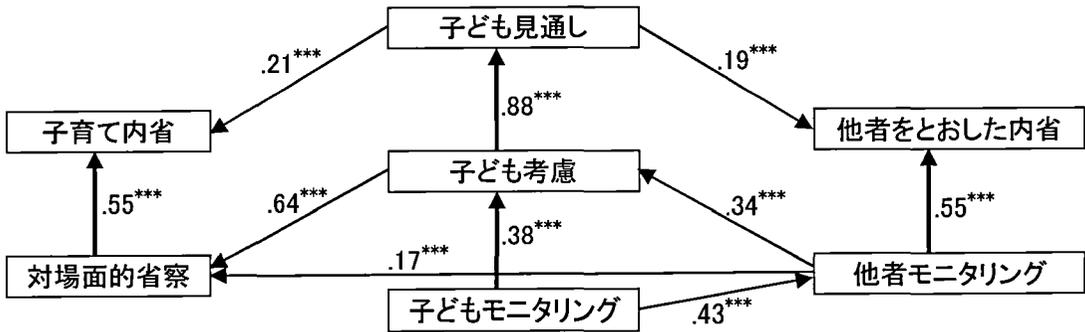
## 引用文献

- 安藤節子 (2000). 保育者養成における学生の成長. 発達, **83** (21), 9-15. 東京: ミネルヴァ書房.
- 中條和光・磯崎哲夫・藤木大介・米田典生 (2007). 授業観察実習が教師志望学生の教授行動に関するメタ認知的知識に及ぼす影響. 日本教育工学会論文誌, **31**, 79-86.
- Grimmett, P. P. (1988). The nature of reflection and Schön's conception in perspective. In P. P. Grimmett, & G. L. Erickson (Eds.), *Reflection in teacher education*(pp.5-16). New York: Teachers College Press.
- 浜口順子 (1999). 保育実践研究における省察的理解の過程. 津守真・本田和子・松井とし・浜口順子 (著), 人間現象としての保育研究1 (増補版) (pp.155-191). 東京: 光生館.
- Mezirow, J. (1981). A Critical theory of adult learning and education. *Adult Education Quarterly*, **32**, 3-24.
- 名須川知子 (1997). 保育者の「気づき」による変容—気になる子どもの行動解釈をめぐる保育者の見方の変化とその影響—. 学校教育研究, **8**, 19-35.
- 名須川知子 (2003). 生活保育の実践と保育者の資質. 片山忠次・名須川知子 (編), 現代生活保育論 (pp.105-122). 京都: 法律文化社.
- 朴 信永・杉村伸一郎 (2006). 子育てにおける親の省察モデルの検討. 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部, **55**, 373-381.
- 朴 信永・杉村伸一郎 (2007). 子育てにおける親の省察尺度の作成に関する予備的研究. 幼年教育研究年報, **29**, 23-30.
- Schön, D. A. (2001). 専門家の知恵—反省的实践家は行為しながら考える— (佐藤学・秋田喜代美, 訳). 東京: ゆみる出版. (Schön, D. A. (1983). *The reflective practitioner: How professionals think in action*. New York: Basic Books.)
- Sternberg, R. J. (1999). 思考スタイル—能力を生かすもの— (松村暢隆・比留間太白, 訳). 東京: 新曜社. (Sternberg, R. J. (1997). *Thinking styles*. New York: Cambridge University Press.)
- 杉村伸一郎・桐山雅子 (1991). 子どもの特性に応じた保育指導—Personal ATI Theoryの実証的研究—. 教育心理学研究, **39**, 31-39.
- 杉村伸一郎・朴 信永・若林紀乃 (2006). 保育者省察尺度に関する探索的研究 (2) —省察の3層モデルによる検討—. 広島大学心理学研究, **6**, 175-182.
- 杉村伸一郎・朴 信永・若林紀乃 (2007). 保育者省察尺度に関する探索的研究 (1) —保育現場における反省的实践—. 幼年教育研究年報, **29**, 5-12.
- 高浜裕子 (2001). 保育者としての成長プロセス—幼児との関係を視点とした長期的・短期的発達—. 東京: 風間書房.
- 辻平治郎 (2005). 森田療法における自己意識・自己内省の概念と測定. 梶田叡一 (編), 自己意識研究の現在2 (pp.119-134). 京都: ナカニシヤ出版.
- 津守 真 (1980). 保育の体験と思索—子どもの世界の探究—. 東京: 大日本図書.
- 若林紀乃・杉村伸一郎 (2005). 保育カンファレンスにおける知の再構築. 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部, **55**, 369-378.
- 吉田直子 (1992). 保育の実践的知識についての考察—保育活動のモニタリング分析から—. 稲沢女子短期大学研究紀要, **14**, 33-40.
- 吉村 香・吉岡晶子・岩上節子・田代和美 (1997). 保育者の成長における実践と省察. 保育学研究, **35**, 288-295.

## 付 記

研究にご協力いただきました保育者の皆様に心より深く感謝いたします。

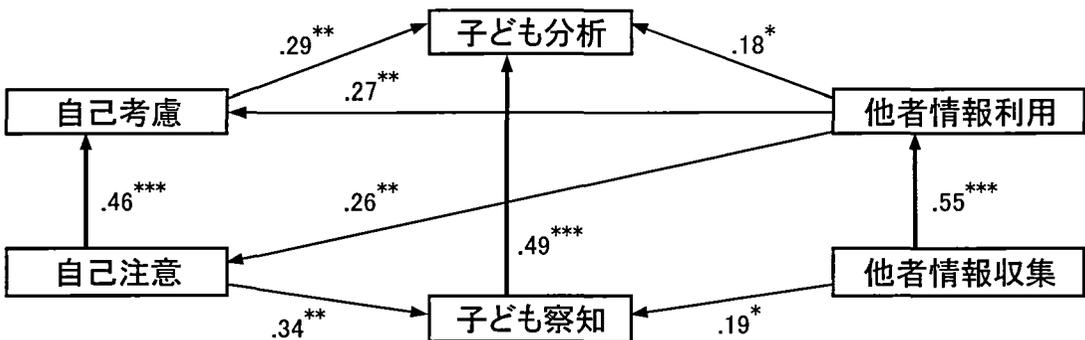
誤



$\chi^2=18.835, df=8, p<.05$   
 GFI=.979, AGFI=.927, CFI=.987, AIC=58.835, RMSEA=.073  
 \*\*\*  $p<.001$

Figure 2 共分散構造分析による省察過程パス解析の結果

正



$\chi^2=1.709, df=6, p<.944$   
 GFI=.992, AGFI=.972, CFI=1.00, AIC=31.709, RMSEA=.000  
 \*\*\*  $p<.001$ , \*\*  $p<.01$ , \*  $p<.05$

Figure 2 共分散構造分析による省察過程パス解析の結果